



教職課程センターだより 第17号

2021年5月22日（土）発行・配信
尚綱学院大学教職課程センター

三年先稽古



昨日21日は「小学校開校の日」という記念日でした。1869(明治2)年、日本初の近代小学校の「開校式」が、京都の上京第二十七番組小学校（後の柳池小学校）で行われたことによるものだそうです。

日本の近代学校制度は1872（明治5）年の太政官布告に始まるので、それよりも3年早かったこととなります。さらに、学校の建設費用の多くは商人や住民の寄付などで賄われ、地域が一丸となって学校をつくったということにも驚かされます。

さて、5月9日から始まった「大相撲五月場所」は、いよいよ明後日が千秋楽です。「日本の国技」とも言われる相撲の世界には、『三年先稽古』（さんねんさきのけいこ）という言葉があります。この言葉は、教員採用試験を受験する皆さんに毎年提供する話題ですが、私はこの言葉から学ぶべきことを次のように考えて教員を続けてきました。

『三年先稽古』という言葉は、「今稽古していることは、3年後に成果として現れる」という意味だそうです。3年後の成果を目指し、一生懸命稽古に励むことの重要性を相撲界ではこの言葉に託して言い伝えてきたのだと思います。

私は学校現場において、子供に教科等の学習で基礎的・基本的な内容を確実に定着させ、習熟させると共に、『三年先稽古』の考えの下に3年先、数年先あるいは数十年先の子供に期待したい事柄についても育み、身に付けさせることにも努めてきました。

例えば、人とかかわる上で不可欠な礼儀作法や社会性・協調性などは、一朝一夕で培うことはできません。年齢を重ねれば、だれにでも自然に身に付くというものでも決してありません。大人が、「子どもには、こんな人間に育ててほしい」という期待を具体的な姿として思い描き、日々教え、導き、「稽古」をさせながら培っていくものだと考え、子供と向き合ってきました。

そして、『三年先稽古』を念頭に置いて、一人一人の子供に足下を見つめさせると共に、自分の進むべき方向をしっかりと見据えさせ、歩ませたいという思いで、学校経営・学級経営を展開してきました。

学生の皆さんも、大学に入学してからの3年間、様々な講義から「学ぶ」ということの意味を深く考えたり、友情やチームワークの大切さを実感したりすることなどを通して、社会人として巣立つための『三年先稽古』を積み重ねてきたことと思います。



教員採用試験まで50日ほどになりました。教員採用試験は、筆記試験に関する力だけではなく、皆さんの大学での『三年先稽古』の真価が問われる重要な機会であると思います。

自分が取り組んできた『三年先稽古』を常に心に留め、教員採用試験合格を目指して、さらに努力を重ねてください。応援しています。

（教職課程センター 特任教授 佐藤 佳彦）